ぷらい

2017 autumn
vol.2

公益財団法人 PHOENIX
木材・合板博物館情報誌

写真：根津「はん亭」

PLY

木と人の素敵な出会いを探る

巻頭インタビュー ■「重ねる」

第2回 根津「はん亭」── 時代をつなぐ物語
はん亭創業者 高須治雄、二代目 高須徹

木を楽しもう 02
東京多摩国際プロジェクト「ゆずの木との出逢い」

Wood&Plywood MUSEUM

右・高須治雄
左・高須徹

第2回

PLY
巻頭インタビュー

「重ねる」

ka・sa・ne・ru

家族の思い出をたどると
そこには「すまい」の歴史があります。
時代に応じた建物。
暮らしに即したしつらえ。
人や町と呼吸をしながら、
時と世代を重ねていきます。
今回は、東京・根津の木造三階家で
串揚げ屋を営む高須さん親子の
すまいをめぐる思い出と
それを次代に継ぐ物語です。

根津「はん亭」——時代をつなぐ物語

はん亭創業者 高須治雄
二代目 高須徹

“三階家から始まった”
人とすまいの歴史

誰もが足を止める貫禄あるたたずまい

いまでは珍しい木造三階家。お父さまの治雄さんが、その姿にひと目惚れして買い取ったと聞いています。

治雄さん ■ 散歩の途中で偶然、出会ったんです。誰もが立ち止まってこの家を見上げるように、私も「おおっ！」と思いましてね。当時は上野の寄席「鈴本」の裏で、カウンターだけの小さな串揚げ屋をやっていました。35歳で脱サラして始めたんですが、住まいは東十条で、夜の遅い商売柄、通勤には苦労しました。家族は家内と長男長女、私の両親という6人家族。母が病気だったこともあり、店の近くに住まいが欲しいと思っていたんです。だから、この三階家を見たときに「ここなら6人がゆうに住める」とひらめいた。上野からも歩けるし、東大病院も近い。これは、もってこいの物件だと思ったんです。

長男の徹さんは当時、小学生。古い三階家を見てどう思われましたか？

徹さん ■ 初めて見たときには、けっこう嬉しかったですよ。「父ちゃん、このお城みたいな家に住むのか!?」って（笑）。古い木造家屋というより、三階建てが格好良かっ

三階家に集まった、人びとの熱い思い

大正時代の建物を住めるようにするには、ご苦労もあったと思います。

治雄さん ■ 調べたところ建てたのは大正6年ごろということでしたが、私も建築的なことは分からない。そこで、当時、上野の店に出入りしていた芸大の建築科の学生さんに相談しました。そうしたら、あの建物は芸大生の間でも有名だ、そこに住むとは面白いと熱心に調べてくれまして、ちょっとやそっとの災害じゃビクともしない建物だから心配ないとお墨付きをいただきました。

大工さんも、学生たちが日本画家の前田青邨のアトリエを建てた棟梁を紹介してくれた。お金もないし、そんな立派な方は困ると言ったんですが、とにかく見てもらえと連れてきた。すると、棟梁は着てきたジャケットを脱ぐなり天井裏に潜り込み、真っ黒になって出てくると「これは金食い虫だ、手に負えないね」って言ったんです。がっかりしましたが、どうせ直すなら、こういう男気のある人に頼まなきゃと、改めて菓子折を持参し何とかしてくれと頭を下げました。手直しの図面をひいてくださったのは浦一也さん。当時は芸大生でしたが、いまや、京都迎賓館なんかも手がける大先生です。快適にはしたいがお金はないという私に、「ここは目立たないから代用品で仕上げよう」などと気遣ってくださるんですが、棟梁は「それなら、俺が材料を出す」と譲らない。みなさん涙が出るほどいい仕事をしてくださった。

「はん亭」の1階に今も残る高須家の“大テーブル”

当時、6人家族はどのように暮らしていらしたのでしょうか。

徹さん ■ 3階は子ども部屋と祖父母の6畳間。2階の奥に両親の寝室。その手前が居間でした。1階には10人掛けの大テーブルがドーンとあった。それは今でも昔のままです。

治雄さん ■ 上野の店で、5、6人でテーブルを囲める空間が欲しいと言われていたんです。だから、1階の三和土に大テーブルを置いて、たまにお客さまをお連れできればと考えた。ところが、改装が進むに連れて雑誌の記事なんかで世間の注目を浴びるようになりましてね。できたとたんに、お客さまが続々来るようになっちゃった。高度成長期のいい時代でね。

徹さん ■ だから銭湯に行くときも、こそこそお客さまの間を縫って出かけました。帰ってきて戸をあけると「いらっしゃいませっ」って声かけられて、すいませんって言いながら3階まで上がるんです。朝ご飯は大テーブルを囲んで食べました。当時は3階に行く階段の上がり口に小さな流しがあって、そこで水を汲んで階段の雑巾がけをするのが僕の日課でした。今でも、その流しの空間だけは残っていて、僕にとっては当時の暮らしの証として残しておきたい場所ですね。その後、祖父母が相次いで亡くなり、ここに住む意味もなくなって、近所に間借りするようになりました。結局、僕がここに住んだのは4年くらいの間ですね。

治雄さん ■ 私にとっては朝起きて仕込みに入って夜寝るまで、この三階家が人生すべてでした。下町に住むのも初めてで、ご近所の人には本当にお世話になった。両親が死んだときも新参者の私らのために、見ず知らずの町内会の方がすべて仕切ってくれましてね。今後は私が恩返しをしなくちゃと、この店を続けてきたわけです。

取材・文：山崎玲子／撮影：川島保彦（※は除く）

蔵を活かした吹き抜けの空間

平成に蘇った明治、大正、昭和のすまい

不忍通りに面した明治時代の建物は、どんな経緯で手に入れられたのですか？

治雄さん ■ 最初はね、隣の方が引っ越すので借りてくれないかというから、借家住まいの家族に住まわせようと思ったんです。それで、改めて中を見たら迷路みたいな構造で、よく見たら蔵もある。蔵のまわりに床を張って住まいとして使っていたんですよ。これは面白いというんで、三階家と隣をつなぎ、蔵の横は吹き抜けにしてテーブルを並べ、食事ができるようにしたんです。

徹さん ■ そうこうするうち、近所で叔母がやっていたあんみつ屋が地上げで立ち退きになるというので、蔵の家と不忍通りに面した漆屋さんとの間に小さな喫茶兼待合を作った。さらに2000年には道路拡張の話が動き出して漆屋さんが出て行かれたので、その建物も私たちが引き取ったんです。

治雄さん ■ 道路を拡幅しなきゃなんないから、セットバックする分の建物を羊羹のようにスパンと切り取って、そこにガラスを入れて鉄の矢来を施し断面が通り側から見えるようにした。浦さんが建物の境目をメモリアルとして残そうと考えてくれたんですよ。

※ 鉄の矢来を配した大通り側の壁面

明治の蔵と町家が大正の三階家と一緒になって1つの店になったのですね。

治雄さん ■ そもそもね、3つの建物はどれも明治・大正時代に繁盛した「三田商店」って下駄の爪皮屋さんのものだったんですよ。大通りに面した町家はその店で、裏手に商品を入れる蔵を建てた。大正に入ると蔵の横に屋根をつけて皮草履を作るミシン場にしたらしい。その後、裏通りに面した三階家を住まいとして増築したんだそうです。

徹さん ■ つまり、この建物は大通り側から順に建てられて、一度は別々の持ち主に渡った。そうとは知らず、私たちは裏通り側から順に手に入れ、今の形になったというわけです。

幸せな建物ですね。ただ、古い物を残していくにはご苦労も多いと思います。

治雄さん ■ まあ、幸せかどうかは分かりませんよ。人間なら百歳をとっくに超えているのに、切ったり張ったり延命措置を施されて。早く休ませてくれって思ってるかもしれない（笑）。

徹さん ■ 僕も店を継ぐつもりはなかったんです。オヤジも構わないと言ってくれたので、大学を出てしばらくは警察官をやっていました。ところが、父が病気で入院したこともあって継ぐことに決めたんです。何かのご縁でオヤジがこの建物を手に入れたわけだし、この建物があって私たちも生活できるんですからね。

根津という町も、下町と言われながらどんどん変わってしまいました。国の有形文化財と言っても補助が出るわけでもない。建物を残したくても残せないんです。

でも、お客さま、とくに若い方が、店の急な階段を上ったりして「懐かしい」っていうんです。そんな時代を知ってるはずがないのにね。やはり、日本人には木造の建物に惹かれるDNAがあるのかなあと思います。そうした声を聞くと、やっぱり残していかなきゃなという気持ちになるんですよ。

■■■

取材を終えて・・・

根津界隈で、ひときわ視線を集める「はん亭」。宵闇に灯りがともり三階家が浮かび上がると、街は往時の面影を蘇らせます。その風情から店も料理も下町風かと思いきや、洗練されたしつらえと串揚げにびっくり。一代目の洒落た出で立ちを見て納得しました。二代目の笑顔ときれいなお辞儀は、気取らずくつろげる雰囲気とつながります。住まう人と建物の幸せな空気をご馳走になりました。

NEZU 'HANTEI'

PROFILE　根津「はん亭」

東京都文京区根津にある串揚げ屋。不忍通りから一本東側の小路までの古い日本家屋を活かした店舗と、からりと揚げたオリジナルの串揚げが名物。小路側角地の瓦葺、総檜造の大正生まれの木造3階建は根津地区のランドマークでもあり、1999年には文化庁有形文化財に登録（建造物）された。

【建物と歴史】
1910（明治43）年ごろ
　爪皮屋を商う「三田商店」の三田平吉が、
　不忍通りに面した店とその裏の蔵を建てる。
1917（大正6）年
　「三田商店」の住居として小路側の三階家を建てる。
1955（昭和30）年ごろ
　三田商店の住居、店、蔵が、ばらばらに人手に渡る。
1970（昭和45）年ごろ
　上野で高須治雄が串揚げ屋「くしー」を始める。
1978（昭和53）年ごろ
　根津の三階家を治雄が買い取り
　住居兼店舗に。屋号を「はん亭」とする。
1990（昭和60）年代
　三階家の隣の蔵付き家屋を入手。
　店舗として改築。
2000（平成12）年
　不忍通りの拡幅工事に際して
　通りに面した店を入手・改築して
　現在の「はん亭」となる。

三田商店

現在の「はん亭」図面

高須治雄（たかすはるお）

昭和9年　東京に生まれる
昭和30年代　日大芸術学部在学中よりテレビの現場でアルバイト。
　民放開業時に広告代理店にてテレビCMの制作に従事。
昭和45年　息子の誕生を機に、上野広小路にて串揚げ屋「くしー」を開業。
昭和53年　根津の古い木造三階家にて串揚げ屋「はん亭」を開業。
昭和63年　神田須田町にて「神田はん亭」を開業。
平成19年　丸の内〈新丸ビル〉竣工と同時に「はん亭 新丸ビル店」を開業。
　同時に「神田はん亭」を閉店。
平成27年　息子 徹を有限会社はん亭 代表取締役社長とし会長職となり
　現在に至る。

高須 徹（たかすとおる）

昭和45年　東京に生まれる。
平成4年　國學院大學文学部卒業。
　警視庁に勤務。
平成7年　家業を継ぐため退職。
　築地中央卸売市場仲卸〈浜長〉に就職。
平成8年　辻調理師専門学校に入校。
平成9年　「はん亭」に入社、現在に至る。

日本木工機械展 2015 会場写真

日本木工機械展／ウッドエコテック 2017 ポスター

日本木工機械展／ウッドエコテック 2017

「日本木工機械展／ウッドエコテック」は西暦の奇数年の秋に名古屋で開催され、2017 年で 43 回目。2017 展のテーマは、《木っとつながるテクノロジー　木っとみつかるエコロジー》。
川上から川下までの各産業に向けた製材機械、合板機械、木工機械などの木材加工機械をはじめ刃物、乾燥機器、プラスチック加工機、エコ機器、環境機器、林業機械などの内外の最新製品が多数展示される国内の業界最大の展示会。大学・研究機関・団体による展示をはじめ、セミナー・シンポジウム・講演会などの催事も開催、木材産業全般に向けて最新情報が発信されます。

ウッドワンダーランド 2017

「ウッドワンダーランド 2017」も別館で併催。テーマは、木育、建築物の中大規模構造化、建築材料の木質化、近未来の住宅を掲げ、子供からシニアまで、見て、作って、体験して、遊べる新しい展示会を開催。
展示内容は、木製品は勿論、本当に乗って動く木製自動車、ギター、ディジュリドゥ、ＤＩＹやゴム鉄砲作り教室等があり、木で遊べる子供向けおもちゃコーナー、木製遊具、大迷路、将棋指導、ドローン体験他。詳細は HP をご参照ください。

ウッドワンダーランド 2017 ポスター

日本木工機械展／ウッドエコテック 2017／ウッドワンダーランド 2017

主催：一般社団法人 日本木工機械工業会
場所：ポートメッセなごや（名古屋市国際展示場）　〒455-0848 名古屋市港区金城ふ頭 2 丁目 2 番地
会期：2017 年 10月27日（金）～ 10月 30日（月）9:00 ～ 17:00　※但し、最終日は時間を短縮することがあります。
入場無料
お問い合わせ：日本木工機械展／ウッド エコテック 2017 実行委員会
電話（052）261-7511　FAX（052）261-7512
E-mail：mokkiten@j-w-m-a.jp　URL：http://j-w-m-a.jp/mokkiten2017/

木を楽しもう 02

東京多摩国際プロジェクト

公式サイト　http://www.tokyo-tama.jp
公式通販サイト　http://www.tokyo-tama.jp/shop/

東京多摩国際プロジェクト
E-mail：info@tokyo-tama.jp
Tel. 042-558-8505　Fax.03-6205-8928

東京事業所：東京都千代田区有楽町 1-6-8
松井ビル 1 階 ビビ 21 ドットコム
多摩営業所：東京都あきる野市小川 633
多摩事業部：東京都青梅市御岳本町 321 森の演出家

ゆずの木との出逢い

2012年、自分を癒しに出かける場所、東京都多摩地区「御岳山」。多摩川を望める大自然の中で、香り豊かな「ゆずの木」と出逢ったことから全ては始まりました。

そのゆずは「澤井ゆず」と呼ばれ、江戸時代の参勤交代でお殿様に献上されていた高貴な香りが自慢のゆず。樹齢100年を越えている古木でもしっかりと実をつけ、その香りは天下一品。なんと樹齢200年を越えている古木もあり、実も毎年なります。

そのゆずの木が危機を迎えていたのです。近年の不景気の影響で、「澤井ゆず」の買い手が安定せず、先祖代々受け継がれてきた大切な「ゆず」を破棄せざるを得ない状態が続いていました。ゆずの木には、靴底を突き抜けるほどの鋭いトゲがあり、収穫作業も一苦労。原木は高さが3m以上もあり、1本の木を剪(せん)定をするのに丸一日かかります。故に売り先がないゆずは、触らずにそのまま放っておくしかないのです。手入れをしないゆずの木は傷み、徐々によい実をつけなくなってしまいます。

そこで、和菓子屋を営んでいる私は、多摩のゆず農家さんと手を取り合い「ゆずの和菓子」づくりが始まりました。初めに試作をしたのが「ゆず最中」。農家のおじいちゃん、おばあちゃんにお集まりいただき試食会を行いました。「ゆず最中」をひとくち食べた腰の曲がった小さなおばあちゃんが「おいしい！」と満面の笑顔になった時は、心から嬉しくなりました。ゆず農家の長老の新井藤作さんが立ち上がり、誇らしげに「澤井ゆず」の歴史を語った姿には感動し心に響きました。私はその年に収穫された全ての「澤井ゆず」を購入することを、その場で即決しました。

初年度に購入したゆずの量は960キロ。どのようにこのゆずを加工し、お菓子を作ればよいだろうか。そこで、立ち上がってくださったのが、「NPO法人多摩草むらの会」の理事長・風間美代子氏。同会は、うつ病などの心の病、精神障がいを持った方々を支援している団体で、平等な雇用、障がい者の経済的な自立を目指して活動を行っています。障がいを持たれた方々の協力のもと、協同作業で960キロのゆずの甘露煮加工が行われました。

みんなで力を合わせ「東京多摩ゆず最中」と「東京多摩ゆずわらび餅」が出来上がりました。その和菓子は、多摩に住む方々、農家さん、障がい者の皆さんの夢と想いが詰まった大切な作品となりました。

それでは、「このお菓子で、もっと多くの人を幸せにできないだろうか。」と、「東京多摩国際プロジェクト」が立ち上がりました。

翌年2013年はゆずの豊作年。収穫量は一気に4・2トンに増えました。4・2トンのゆずの加工は全て手作業で行われ、果てしない作業に諦めそうになりましたが、みんなの強い想いでなんとか乗りきり、4万個を越えるお菓子をつくり、完売させることが出来ました。

現在に至るまでの間、さまざまな課題・問題に直面し、その都度、解決策をみつけ、「東京多摩国際プロジェクト」の仕組みが構築されました。2015年度は、更にあきる野市の「盆堀ゆず」農家さんも加わり、ゆずの購入量は過去最高の5・4トンに増えました。

プロジェクトに賛同してくださった企業の協力のもと「東京多摩ゆず和菓子」だけではなく、「東京多摩ゆずポン酢」「東京多摩ゆずサイダー」「東京多摩ゆずシロップ」「東京多摩ゆずホットペースト」等のゆず商品が誕生しています。

東京多摩国際プロジェクトのロゴマークは、平仮名の「ゆ」をモチーフに、私自らが筆で描きました。

東京多摩プロジェクトロゴマーク

「ゆず」の「ゆ」
「夢」の「ゆ」
「友情」の「ゆ」
「勇気」の「ゆ」

「夢」を持っていると人生は楽しくなる。「友情」が、喜び、楽しみを倍増させる。「夢」と「友情」があれば、さらなる「勇気」がわいてくる。

「ゆず」が、みんなを繋いでくれました。

人は森から恵みをいただいています。その一つが「ゆずの木」。

森の恵みを生かし、人々の暮らしに繁栄させ、そしてその恵みをまた森に返す。

この循環が大切に思われます。

東京多摩国際プロジェクト
創業者　古関あさ珠
（ビビ21ドットコム 代表、
和菓子店 銀座かずや 経営）

古関あさ珠

農家さんと「銀座かずや」古関一哉

東京多摩ゆず最中

東京多摩ゆずわらび餅

REPORT

博物館 夏期ワークショップ風景

木工教室「コリントゲームを作ろう」

木工教室「ジグソーパズルを作ろう」

夏休み合板・LVL工場見学＆工作体験

奨学事業・研究助成

木材・合板博物館は公益財団法人 PHOENIX によって運営されていますが、当財団では育英事業として、高校生を対象にした奨学事業と、木材等の研究を行なっている大学院生への研究助成を行っています。
今年度は高校生２名、大学院生３名に対し助成を決定しました。研究助成の内容については当博物館のホームページをご覧ください。

木材・合板博物館　友の会のお知らせ

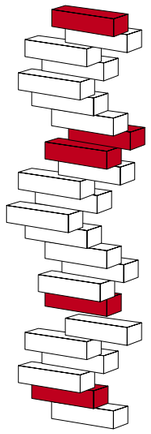
木材・合板博物館は 2007 年 10月にオープンし、2015 年からは公益財団法人 PHOENIX の活動の中心に位置付けられています。木材や合板の展示を中心に、セミナー開催等を通して「木を知り、木を使い、木を活かし、森と生きる」について考える機会を提供しています。
この度、当博物館では個人会員を中心とした「木材・合板博物館　友の会」の会員を募り、広く交流の場を設けて参りたいと思います。木材および合板等の業界関係者につきましてはプレミアム会員としてのご登録をお願いいたします。一般会員、学生会員の種別もございますので、木材の魅力や、森と木と環境問題にご興味がある方の積極的な参加をお待ちしています。年会費は下記の通りです。

■ プレミアム会員　年額 10,000 円　■ 一般会員　年額 5,000 円　■ 学生会員　年額 2,000 円

プレミアム会員様向けにはセミナー、イベントのご案内をいたします。一般会員、学生会員の皆様には、当館情報誌「PLY(プライ)」を季刊でお送りし、さらに、特典として当館 MUSEUM SHOP の商品の割引販売を行います。(一部除外品あり)
木材・合板博物館 友の会の入会申込書は木材・合板博物館ホームページ (http://woodmuseum.jp/) よりダウンロードしていただくか、電話 (03-3521-6600) にて申込書希望のご連絡をお願いします。

イベント情報

Event schedule



2017 年	10.27 → 30	日本木工機械展 / ウッドワンダーランド（ポートメッセ名古屋）
	10.29	第 9 回「木と合板」写真コンテスト結果発表
	11.2	合板の日記念式典（新木場タワー）
	11.4 → 22	第 9 回「木と合板」写真コンテスト入賞作品展示（新木場タワー）
	11.11 → 12	江東湾岸まつり（豊洲公園）

ワンコイン工作（博物館）

※文部科学省による平成29年度「子ども夢基金」の助成を受けています。

10.21	「ビー玉コロコロを作ろう」
11.18	「木のシロフォンを作ろう」
11.25	「クリスマスツリーを作ろう」
12.2	「まつぼっくりツリーを作ろう」
12.16	「木のぽち袋を作ろう」

セミナー情報

Seminar information

第153回木質構造研究会

「2016 年熊本地震により被害を受けた現代住宅の設計・仕様」
日時：2017 年 10 月 18 日 (水)　15:00 ～ 18:00
場所：東京大学セイホクギャラリー

木質構造研究会技術発表会

日時：2017 年 12 月 7 － 8日
場所：東京大学弥生講堂一条ホール

お問い合わせ：木質構造研究会　http://www.jtes.org

PLY INFORMATION

A

『日本の木と伝統木工芸』
メヒティル・メルツ著 / 林裕美子訳
3,456 円（税込）

日本の伝統的木工芸における木材の利用法を、職人への聞き取りを元に技法・文化・美学的観点から考察。ドイツ人東洋美術史・民族植物学研究者による著書の待望の日本語訳版。日・英・独・仏 4 カ国語の樹種名一覧表と木工芸用語集付。

海青社
TEL 077-577-2677　FAX 077-577-2688

B

『木材加工用語辞典』
日本木材学会機械加工研究会編
3,456 円（税込）

木材の切削加工に関する分野の用語はもとより、関係の研究者が扱ってきた当該分野に関連する木質材料・機械・建築・計測・生産・安全などの一般的な用語も収集し、4,700 超の用語とその定義を収録。50 頁の英語索引も充実。

海青社
TEL 077-577-2677　FAX 077-577-2688

C

『図説 世界の木工具事典 第 2 版』
世界の木工具研究会編
2,900 円（税込）

本書は、日本と世界各国で使われている大工道具、木工用手工具を使用目的ごとに対比させ紹介したものである。さらにその使い方や製造法にも触れている。最終章では伝統的な木材工芸品の製作工程で使用する道具や技法を紹介。

海青社
TEL 077-577-2677　FAX 077-577-2688

D

『WOOD』
Edited by Richard Mabey
PHAIDON
5,980 円（本体）

世界最高の木を素材とする建築作品の新奇な、深い洞察に満ちた、意表をつく考察を提供する一冊。取り上げられるのは過去 1000 年間の 170 の建造物。ベストセラー作家であり自然科学者であるリチャード・マビーによるエッセイは、木と建築の密接な関係の洞察へと誘う。

エーアンドエーブックス
TEL 03-3868-9560

E

結城座公演
『雀去冬来（チュエ チュイ ドン ライ　すずめ　さりて　ふゆ　きたる）』

無形文化財にも指定されている日本唯一の江戸糸あやつり人形劇団の結城座の公演。結城座初の LIVE 映像を駆使した人形芝居。人形は操作盤（手板）・首・手足は桐の木、腿は竹、胴は朴の木を使用。頭は張り抜きに紙を数枚重ね、原型を作成。

公演：11 月 30 日～12 月 3 日
場所：座・高円寺 2
結城座　TEL 042-322-9750

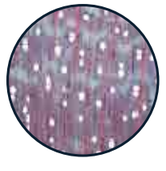
F

『六田知弘写真展 記憶のかけら』

伊豆大仁にある江戸時代の木造民家で、国の登録有形文化財「知半庵」では、文化交差をテーマとするイベント「知半アートプロジェクト」を 2007 年から実施。今回は、東日本大震災の非日常の「モノの記憶」と日常に潜む「イシの記憶」の写真展を屋内外で展開。
http://chihan-art.com

会期：11月3日～12月2日の木・金・土・日、
　　および 11 月 20 日～22日
問 info@chihan-art.com

PLY 木の誌上展覧会（裏表紙）

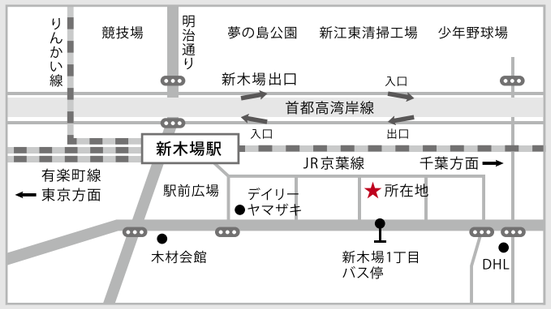


第 2 回 ■ 光学顕微鏡写真「カエデ」

ムクロジ科カエデ属の広葉樹で多くは落葉性であるが常緑性のものもある。世界中では約 160 ～ 200 種、日本でも 20 数種が存在する。手のひらの形をした葉が連想されるが、ごく普通の葉の形のものや 1 枚の葉が 3 枚の小葉に分かれたものなどもある。江戸時代から多くの園芸品種が造られ、今でも秋にはさまざまないろどりのカエデを楽しむことができる。また、ヴァイオリン杢が有名なシカモアカエデなど木材や樹皮も多用途に利用されている。

木材・合板博物館　副館長　平川泰彦

公益財団法人 PHOENIX 木材・合板博物館のご案内



【開館時間】 10:00 ～ 17:00（最終入館時間 16:30）
【入 館 料】 無料
【休 館 日】 月曜日、火曜日、祝日、年末年始

※幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
※都合により開館日・時間を変更する場合がございます。

【アクセス】
❶ ●東京メトロ有楽町線 ●JR 京葉線 ●東京りんかい高速鉄道
「新木場駅」下車 徒歩7分

❷ ●東京メトロ東西線
「東陽町駅」下車
→ 都営バス [②のりば] 木 11 甲
「新木場 一丁目」バス停下車 徒歩1分

facebook　HP

http://www.woodmuseum.jp/

このビルの
3F・4F です！

所在地：東京都江東区新木場 1-7-22
　　新木場タワー 3F・4F
TEL 03-3521-6600／FAX 03-3521-6602

mini 合板情報 02

合板の日の由来
平成24年11月2日に特定非営利活動法人木材・合板博物館及び日本合板工業組合連合会、日本合板商業組合の共同提唱により、明治40年に、故浅野吉次郎氏が、我が国で初めて、ロータリーレースを開発し合板が製造された日である 11月3日を合板の日と制定した。（H）

PLY 第 2 号 2017 autumn

【発行日】 2017 年 10 月 10 日　■定価：540 円（消費税込）
【発行】 公益財団法人 PHOENIX 木材・合板博物館
〒 136-8405
東京都江東区新木場 1-7-22　新木場タワー 3F・4F
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602
E-mail info@woodmuseum.jp

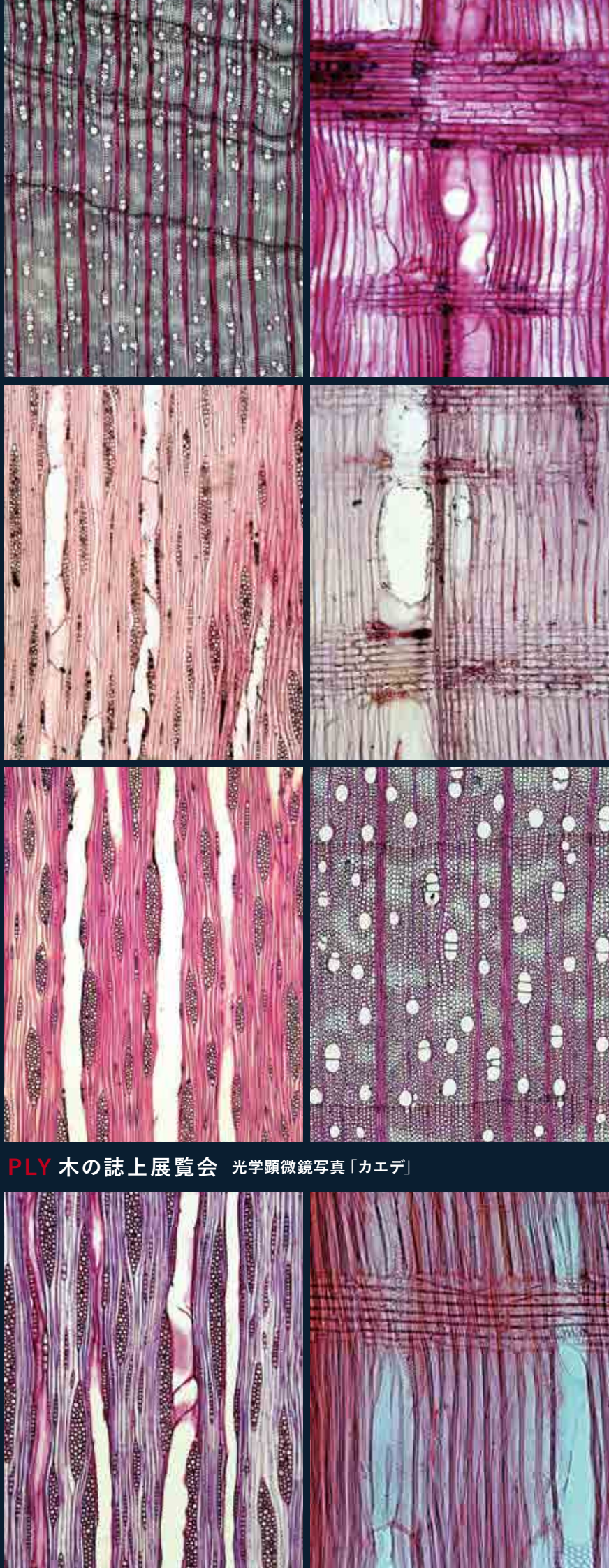
【発行者】 吉田繁
【編集】 安藤直人（編集長）、山口和美（副編集長）、
PLY 編集委員会
【デザイン】 丸山佐知子

編集後記

PLY 秋号をお届けします。10 月 8 日は木の日と言われていますが、十と八を組み合わせると木という字になることに由来しています。しかし、1 日だけではピンポイントなので 10 月が木の月間とされ、各地でイベントも開催されます。10 月は「じゅう」という音から住月間とも言われています。
秋は食欲の秋ですが、PLY を片手に木のこと、木造住宅のことに思いを巡らせていただければ幸いです。（&）

PLY（ぷらい）

PLYとは重ねるという意味があり、
WOODを加えると
PLYWOOD（合板）を
意味している。
歳月や経験を重ねることの重要性と、
木材が年輪を重ねて
成長する姿も重ね合わせている。



PLY 木の誌上展覧会　光学顕微鏡写真「カエデ」

写真提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所